

■研究プロジェクト①**■研究チーム①****「歴史のトランスナショナル化とその問題点」****「グローバル化における歴史認識の方法」****研究所プロジェクトおよび研究チームの研究課題名**

研究所プロジェクト「歴史のトランスナショナル化とその問題点」

研究チーム「グローバル化における歴史認識の方法」

研究期間（研究所プロジェクト）

2007年4月～2010年3月

予算額（研究所プロジェクト）

1,209,000円

研究代表者およびチームリーダー

岡本 充弘（文学部史学科・教授）

研究分担者名（研究所プロジェクト）

研究員

後藤 明（文学部史学科・教授）

高畠 純夫（文学部史学科・教授）

道重 一郎（経済学部経済学科・教授）

客員研究員

渡辺 賢一郎

研究分担者名（研究チーム）

研究員

後藤 明（文学部史学科・教授）

高畠 純夫（文学部史学科・教授）

道重 一郎（経済学部経済学科・教授）

客員研究員

都甲 裕文、渡辺 賢一郎、中村 崇高

院生研究員

白田 拓郎、竹内 洋介、生島 修平、根本 泰充

研究計画の概要

歴史のトランスナショナル化の問題は、近年歴史学の領域では大きな関心を集めるようになっていく問題である。この問題がとりわけ大きな関心を集めるようになった理由は、一つはドイツや日本などにおいて、第二次世界大戦後に確立された近代化以降のそれぞれの社会への批判に基づいたそれぞれの戦後歴史学への批判が生じ、ナショナルな視点からの歴史認識が再び論じられるようになったためである。こうした問題への議論は、いわゆる歴史修正主義をめぐる議論として展開されるようになるが、そうしたなかで浮かび上がってきた問題は、戦後歴史学に批判的な観点にたつ修正主義的な立場ばかりでなく、歴史の科学性を掲げた戦後歴史学もまた、ナショナルな枠組みを含意していたということである。現在、トランスナショナルヒストリーは、こうしたこれまでの歴史学への批判として議論されるようになっていく。しかし、歴史のトランスナショナル化には、いくつかの問題が存在している。その一つは、それが実はそれまでのナショナルヒストリーを前提としていることであり、もう一つは、トランスナショナル化がどのような方向に向けて行われるのかという問題である。例えば、近代西欧を基準としてトランスナショナル化というのは、歴史認識にとって本当にポジティブなものかという問題をあげることができるだろう。本研究は、以上のような立場にたち、近年試みられている歴史のトランスナショナル化を、具体的な研究事例に則して、批判的に検討することを目的とする。

なお、本プロジェクトは人間科学総合研究所内の研究チームである「グローバル化における歴史認識の方法」と有機的に関連しているため、チームの研究活動報告とあわせて、以下に報告する。

当該年度の研究活動

1. 研究方法

本プロジェクトで一貫してもちいてきた研究方法は、研究会などをおしてメンバー間の意見の交流をはかるとともに、国内外の研究者を招き、テーマを特定した公開の研究会、セミナーを開催し、その成果を報告書におさめ、広く内外の研究者に提示していくことである。とくに平成 22 年度は最終年度であったので、総括的な報告書を作成することにも重点をおいた。

2. 研究経過ならびに成果の概要

最終年度にあたっては本プロジェクトの課題である「歴史のトランスナショナル化とその問題点」というテーマにそって、歴史が「ナショナル」なものから「トランスナショナル化」されたものとなる過程にある「問題点」を、ナショナルな歴史における問題点、グローバル化されつつある歴史の問題点、の双方から中心的に検討した。

具体的には平成 22 年 7 月に東京大学准教授のピーター・ロビンソン、12 月にコーネル大学教授の酒井直樹教授を招き、公開の研究会をおこなった。これらの会には従来からも本プロジェクトの主宰する研究会に参加してきた国内の多くの研究者が参加し、メンバーと一体となった議論を行うことができた。またこれにくわえて平成 23 年 3 月にハーバード大学のスヴェン・ベッカー教授を招いてセ

ミナーを行う予定であったが、教授の来日後の東日本大震災が発生し、教授が離日したためセミナーは急遽中止となったが、すでに教授からは討論資料が送られており、後日あらためてこの資料にもとづいた会をおこなう予定である。

また今年度は最終年度ということで、成果の公表を積極的に行った。特筆されてよいことは、平成22年8月号の『思想』において、本プロジェクトが平成21年度にスタンフォード大学教授のヘイドン・ホワイトを招いたセミナーの成果が、このセミナーに参加した研究者の協力を得て明らかにされたことである。日本の思想界において『思想』が果たしてきた大きな役割からみて、本プロジェクトが解明を試みた問題がこうしたかたちで取り上げられたことは、本プロジェクトの目指したものが内外からの高い評価に値するものであったと考えている。くわえて最終年度にあたって独自の成果報告書(全110頁)を平成23年2月に刊行した。なおこの報告書においては本プロジェクトの問題設定に対応するかたちで、英文、邦文の論文を掲載し、成果を国際的に開示することを試みた。

以上に加えて今年度は各プロジェクトメンバーによる個人的な活動も積極的に行った。とくに研究代表者(岡本充弘)は平成22年8月にアムステルダムで開催された第21回国際歴史学会議に参加し口頭発表を行うなどして研究成果の国際的開示につとめた。

本研究が明らかにすることができた具体的な問題は、以上の公表された成果を参照していただきたい。

3. 今後の研究における課題、問題点

3年間(追加プロジェクトによる採択を含めば4年間)にわたる活動をとおして、メンバー間の意見の交換をふまえて、内外において評価の高い、あるいは斬新な視角をもつ研究者を招聘するなどして行われてきた本プロジェクトの活動は、固定された少数のメンバーだけではなく、多くの研究者の関心を集めることができ、一定の成果を上げることができた。歴史のトランスナショナル化という問題ばかりでなく、歴史認識に伴う基本的な問題、たとえば歴史や記憶の集団性や個人性、歴史の表象のされ方の多様性、歴史の場の多様性といった本プロジェクトが取り上げた課題は、今後歴史の問題を考えるにあたっての基本的な問題として、本プロジェクトの企てに参加した多くの研究者によって受け継がれていくはずである。また本プロジェクトが必ずしも十分に取り上げることのできなかつた課題は、一部メンバーが重複する「トランスナショナルカルチュラルヒストリーの今後」(平成23年度研究所プロジェクトとして採択)によって解明されていくことになるが、そこでは本プロジェクトの不足点として指摘されてきた非ヨーロッパ的な視点の導入、さらなる国際化などが課題として設定される予定である。

4. 研究発表

(1) 公開研究会

日時：7月17日(土) 15:00-17:30

会場：東洋大学白山キャンパス第一会議室（2号館3階）

報告者：Peter Robinson（東京大学）

Re-centering historical experience in the wake of Postmodernism: Ankersmit and beyond.

司会：岡本 充弘（東洋大学）

(2) 公開シンポジウム

公開シンポジウム「ナショナルヒストリーと国語の形成」

日時：2010年12月11日（土）13:30-17:30

会場：東洋大学白山キャンパス6号館6208教室

報告：渡辺 賢一郎（東洋大学）

「ナショナルヒストリーと国語の形成についての考察」

下田 啓（ヴァッサー大学）

「方言の発見 - 明治期の会津地方を中心に」

酒井 直樹（コーネル大学）

「翻訳の比喩論と国体 - 国語という理念と国民共同体」

司会：岡本 充弘（東洋大学）

主催：東洋大学人間科学総合研究所 共催：白山史学会

(2) 報告書

岡本充弘編『歴史のトランスナショナル化とその問題点』人間科学総合研究所、2011年2月